

刊行にあたって

國學院大學日本文化研究所所長 杉山林 継
國學院大學學術フロンティア事業運営委員長

柴田常恵先生の写真資料目録の第1分冊を刊行することができた。柴田先生は東京帝国大学人類学教室助手から、史蹟名勝天然紀念物調査会、内務省地理課、あるいは文部省にて文化財行政に関わり、77才で昭和29年に亡くなられるまで戦後も文化財専門審議会委員を務められている。

1970年代に築地書館から刊行された『日本考古学選集』全25巻の内の12巻に大場磐雄先生が柴田常恵集を担当されて1巻とされている。大場先生の22才年上となる柴田先生は、内務省時代や、戦後の文化財専門審議会でも先輩で教えを乞うたこともあったようである。柴田先生の没後まもなく、資料一括を國學院大學に寄贈を受け、整理しようとしたのは深い思いがあったからと言える。その大場先生も昭和50年には他界され、遺言によって研究資料全てが國學院大學に寄贈された。柴田先生の資料が昭和30年代前半に大場先生の下で篠崎四郎氏などによって一部整理されたり、大場先生の資料についても一部が考古学研究室の乙益重隆氏、小林達雄氏などの下で整理作業が進められていた。しかしその分量の多さは簡単にまとまるものではなかった。

平成10年文部省の学術推進事業の一つとして学術フロンティア構想が文科系へも適用され、翌11年國學院大學も応募し、拠点指定を受けることができた。理科系のように新発見を目指す研究ではなく一部の人は過去のものを扱って、何でフロンティア構想かと言われたが、國學院大學のように古くからの歴史を持ち、学問を蓄積してきた大学にあっては、先学の学問を受け継ぐと共に貴重な図書資料をはじめ、多くの学術財産を保有しているのである。これをどれだけ有効に活用しているであろうか。幸いにして現代は、保存法も、利用法も日進月歩、めまぐるしく発展している。その中で金で買うことのできない多くのデータを埋れたままにしておくことは、研究者の怠慢である。次の時代に伝える方法を考えなければならない。大学の持つ知的財産を活用する。このことが認められたことにより、まずはその方法論の検討からはじまり、手がけられる劣化画像の再生活用にとりくんできた。

大場先生のガラス乾板資料の整理も進んでいるが、今回は柴田先生の焼付写真資料の目録を世に出すこととした。大場博士資料をはじめとする一部の資料はインターネット上でも公開し、好評を博しているが、今回のような図目録の刊行も必要ありと考えてこれからも実行していくつもりである。大場、柴田両先生の資料ばかりでなく、折口信夫、田沢金吾、神林淳雄、宮地直一、河野省三、武田祐吉、八代国治、御巫清勇、坪井洋文、等々多くの先生方の資料が整理を待っている。当然のことながらこれらの資料を活用した研究も進めなければならないが、今回の学術フロンティア構想が大きな力となって新しい研究活動が始動し、この作業もそうであるように若手の研究者が刺激を受け、大きく育ちはじめたことは事実である。平成14年からは文部科学省21世紀COEプロジェクトも起動している。当研究所はこのプロジェクトの拠点ともなっている。研究所設立50周年を迎えようとする今、より効果の上がるように両者タイアップしながら研究活動を進めたい。